

(80号)

中国シルク情勢 (2017年5月)

日 絹 連

年に一度の中国シルク業界大会が4月20日に蘇州で開催された。全国各地のシルク企業及び関係者など約300人が参加し、非常にタイトな日程であったが交流と分析が徹底的に行われた。各代表からは、政策から実施内容まで具体的な発表があった。

1. 江蘇省蘇豪国際集団沈祥元氏、歓迎挨拶
2. 中国シルク会長楊永元氏「中国シルクの今後の発展と重点」
3. 繭糸弁処長劉斌氏「2016年度全国シルク運行情況」
4. 江蘇州シルク協会楊偉氏「蘇州シルクの現状」
5. 中国紡績工業連合会劉欣氏「紡績工業運行情況」と「対外貿易情勢」
6. 広西省宜州市書記周飛氏「宜州シルク発展経験」
7. 雲南省陸良県段有康副市長「雲南陸良シルク生産情況」
8. 中国シルク協会副会長錢有清氏「2017年シルク情勢分析」
9. 浙江省シルク協会呉金根会長「シルク輸出情勢分析」
10. 広西省シルク協会蘭樹思会長「広西シルク生産と経営情勢」
11. 中国糸類検査聯盟秘書長・浙江省生糸検査センター副主任董鎖拽氏「2016年度生糸輸出と品質分析」
12. 中国嘉興生糸繭取引所劉卓明総経理ほか15名「敬慎規律、危機並存—2017相場」
その中でもっとも参考になったのが中国糸類検査聯盟秘書長・浙江省生糸検査センター副主任の董鎖拽氏による「2016年度生糸輸出と品質分析」の報告であった。

各省の生糸平均等級、A品率同期比

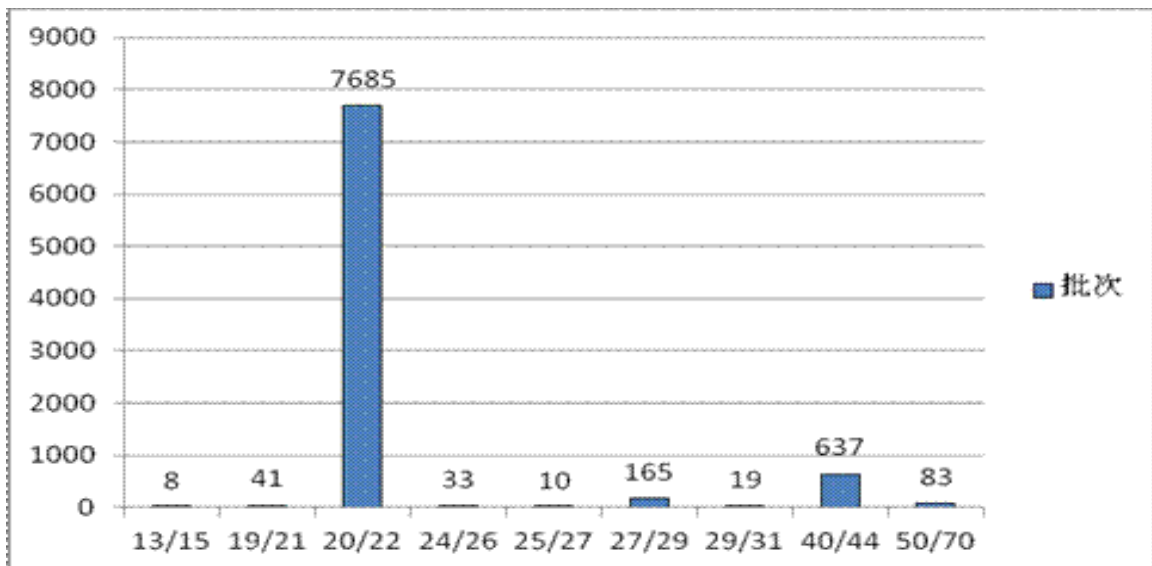
各省	A品率 (%)		増減 (%)	平均等級		増減 (級)
	2016年	2015年		2016年	2015年	
浙江	95.22	94.90	+0.34	4A19	3A76	+0.43
四川	99.47	99.24	+0.23	3A99	3A93	+0.06
無錫	97.29	95.93	+1.36	5A03	4A89	+0.14
広東	94.44	98.88	-4.44	3A72	3A61	+0.11
広西	95.59	96.73	-0.14	3A41	3A39	+0.02
重慶	100	100	0.00	3A45	3A54	-0.09
汉中	99.82	98.96	+0.86	4A66	4A59	+0.07
合計	97.40	97.28	+0.12	4A06	3A78	+7.10

データ分析：2016年が2015年よりA品率が0.12%上昇した理由は糸の色差、色ムラ、二本合せ、織度不合格、重さなど不合格率が下がったため。平均等級4A06が同期比0.05アップした。特に浙江省が0.43アップし、ヨーロッパからの需要が鮮明的となった。広西は2015年より生繭生糸品質改善も安定してきた。

2016 年度輸出生糸商検等級の分布（検査ロット）

規格	総ロット	6 A	5 A	4 A	3 A	2 A	A	B 品	5A+6A 対 総ロット との比率 (%)
13/15	8	1	6	1	0	0	0	0	87.50
19/21	41	28	9	1	3	0	0	0	90.24
20/22	7,685	578	1,359	2,663	2,649	357	45	34	25.20
24/26	33	28	5	0	0	0	0	0	100.00
25/27	10	8	2	0	0	0	0	0	100.00
27/29	165	28	27	69	36	5	0	0	33.33
29/31	19	8	11	0	0	0	0	0	100.00
40/44	637	19	53	213	239	74	25	14	11.30
50/70	83	0	0	46	31	4	1	1	0.00
合計	8,681	698	1,472	2,993	2,958	440	71	49	25.00

上記の総ロット割合統計グラフ



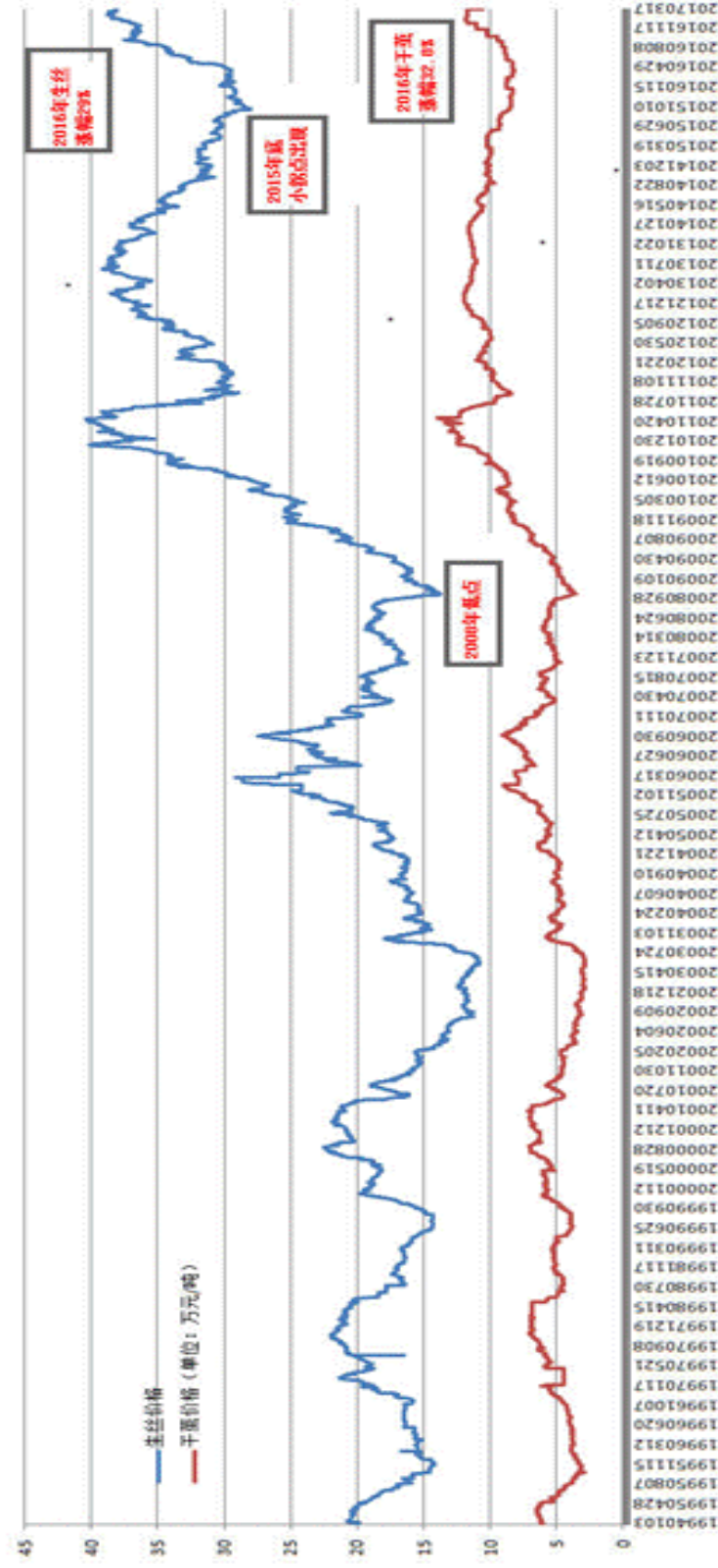
また、嘉興生糸取引所の劉総経理が2017年の生糸相場の展望について、「世界各国の不確実性が増えている。前半は高い水準で運行しており、後半は需要により決定的となり人民元の変動縮小と中国経済の安定も期待できるので生糸相場は安定するでしょう」と認識した。

茧糖比价略有回升



16年上半年基本持平，年底到17年3月份小幅反弹起稳
比较效益受到甘蔗、柑橘等作物的冲击，广西的桑园面积继续增长的难度加大

1994-2017年3月生丝，蚕茧价格趋势图



2016年：干茧全年上涨32.8%，生丝全年上涨29%



蘇州《2017 中国全国繭生糸織物供給情勢分析会》風景

4月中国生糸繭取引所の相場について、3～4Aの現物相場は37.5～37.8万元/トンで、3月より少し下がったが、場外の取引はあまり変動がなかった。5～6Aの場外取引も先月とあまり変動がなかった。

これからの広西の生糸製糸は、多くの生繭生糸が生産できているため相場への影響を与えるとの見方が大半であり、引き続き注目していく必要があると考えられる。

以 上